

菊陽人 りさーち



よしなが しんじ
吉永 真史くん
(9歳・三里木)

- 趣味
サッカー、少林寺拳法、詩吟
- 将来の夢
サッカー選手、詩吟の先生
- 自慢できること
少林寺の大会で最優秀賞をとったこと
- 自分を一言で表すと
元気が良すぎる

「菊陽人りさーち」に掲載を希望される人は、はがきに「氏名」「年齢」「住所」「連絡先(昼間)」を明記のうえ〒869-1192菊陽町役場総合政策課「菊陽人りさーち」係までお送りください。
注)掲載対象は、小学生以上で菊陽町に居住している人に限ります。親子、祖父母と孫など2人1組での掲載もできます。掲載が決まりましたら、こちらからご連絡させていただきます。



ほしこ おうが
星子 帝雅くん
(9歳・三里木)

- 趣味
バスケット、空手
- 将来の夢
バスケット選手、映画の監督
- 自慢できること
料理を作ることができる
- 今一番やりたいこと
バスケット

ゆたかな心をはぐくむ 人権のひろば

子どもの目、子どもの声
人権
作文シリーズ
【No.40】

問い合わせ
人権教育・啓発課
☎232-2113

*作者の学年は作文がつづられた昨年度の在籍学年です。
*◇印からの文章は先生のコメントです。



▲こいにえさをあげたよ

運動公園に行ったよ。
行くのはパパとママが決めた。
池があってコイがいたよ。赤と黒と黄色とオレンジもいた。
初めにお兄ちゃんと僕が見つけたよ。お願いして餌を買ってもらったよ。みんなで餌をあげた。
弁当はパパとママが作ったよ。
ウイナーと空揚げ、玉子焼きが入ってたよ。パパのおにぎりもおいしかった。

運動公園に行ったよ
武蔵ヶ丘第二保育園
竹田 るい
5歳

菊陽句会報

きくよう文芸

短歌会

金環日蝕日本列島初夏のシヨ	坂本百合子	耐へしこと今はなつかし田草取	吉野 早苗
話題とて過去はほりおこす夏座敷	田中 郁子	幾代経し石積畑の麦の秋	井上久美子
夏草や幼の語りとめどなし	井 子文	神秘なる金環日蝕夏空に	宮川ユキエ
水羊羹茶筌静かに回す音	財津 早雪	短夜や星も短く落ちにけり	日高 妙子
更衣取り揃えては父見舞う	原野レイ子	小流れや虫追ふ児の後を追ひ	曾我 育代
雨さそふでむし高く角立てて	力 幸子	無装備の草取り肌の染み気にし	曾我トモ子
あじさみの紫やさし夕日中	寺尾千代子	紫陽花の小穂一挿し雨籠り	紫藤 祥子
石橋を終の住み処と河鹿鳴く	高橋 孝子	法話解く僧の一語に桐の花	村上 朋子
ことのほか孫に会ひたし永葉喰ぶ	堀川 妙子	ドッコイシヨ脚立担げば山笑ふ	野口 令史
水あそびつかれてねんねの子守歌	福田 貴子	笑ふこと多き夏なれ余生なれ	松橋 強
梅雨の雨冠水道路小川だな	佐藤 健	搔き終へし代田澄みゆく夕月に	佐藤 澄世
風に揺る青葉の虫を捕る雀	佐藤 節		

雨音に目覚めたる夜半に聞こえる車の音の遠く近くに	今村 貞子
一年に一度の出番田植え機の油を差せり十五年目の夏	梅田 國雄
うらうらと春日は照りて麦穂なかな雲雀はのぼるこの青空に	河北 幸一
橋下の葦は倒れて水嵩は勢い増して吾が前を行く	菊川あさみ
風吹けば山の斜りに風車舞う景色も人も変わりゆきなき	佐藤せい子
湯上りに月影見んと庭に出るそよ吹く風は肌心地よし	下田 久子
廃線の鉄橋を渡れば眼下にかすみ見ゆる集落のあり	中村トシエ
田に映る浮雲ひとつ搔き分けて静けき昼を水澄まし浮く	山川 カツ

「田の粥」を学んで

菊陽南小学校5年 三宅 剛平



▲竹田るいさん

◇お兄ちゃんと遊んだことや手伝いをしたこと、家族のことをよく話してくれま

す。

いつも元気

いっぱい体を動かすのが大好きなるいさんですが、運動公園で発見したコイに餌をあげたことがとても楽しかったようで、生活画でも一番初めにコイの餌を描いて見せてくれました。

ぼくは山の粥を学んで日名倉山のふもとの村の人が差別されているのに粥を配ったのは、すごいと思います。里の人から差別をされたのに、人と人とのつながりを切ろうとせず、つなげようと思ったのが一番すごいと思います。

でも里の人は、情けないと思います。なぜかという、粥をもらったことで、大変な時期を乗り越えたのに、殿様から罰せられるからといって差別を続けたからです。村の人が粥を何日も作ってくれたから、そうやって助けてくれる人たちがいたから生きていられたのに、差別を続けたことが許せないと思います。

しかし、ぼくも情けなかったときがある



▲仲間と共に

◇差別されながらも、それを差別で返さず、その人たちとつながり続けたことをすごいと感じたのです。この学習から自分を振り返り、自分の行動や気持ちに重ねて考えたところが、剛平さんはすごいと思います。

ります。友達からしてもらったことに対して、気持ちを返せなかった時です。あの友だちが、ぼくが筆箱を落としたとき一緒に拾ってくれました。しかし、別の時にその友達が筆箱を落としたときにぼくは面倒だと思って拾いませんでした。差別をしたわけではないけれど、面倒という気持ちでその友達とつながろうとしなかったことを後悔しています。

ぼくはもうこのようにはしません。ぼくは里の人たちのようにはなりたくないと山の粥を学んで思いました。人と人とのつながりを切ることをしない人になりたいです。